

ました。

五月十六日家へ着きました。母が「お前の嫁はもう決めておいたぞ」と。

私の軍隊での労苦と言っても

1 歩兵のように歩くことはない車両部隊。

2 連隊本部勤務。

で労苦は少ないと感じています。ただ不満であったことは進級の事でした。昭和十八年進級の時、上等兵より兵長になれず進級が一回おくれました。人事係曹長さんが「くやしいだろう」と言ってくれました。連隊本部の将校下士官全部が私を推薦してくれたのに、連隊副官が筆耕の上手な者を推薦して私は落ちたのです。次に伍長に任官の時は私が一番となり、前の兵長の時の雪辱を遂げる事となりました。

結婚は昭和二十一年十一月十七日に式を挙げました。現在妻も元気で子供は男女男と三人です。孫は男ばかり三人。曾孫は女一人。

復員後の地域の役職を振り返ると

1 消防分団長

2 部落の区長

3 農業委員 五期（一期三年）この内会長三期

4 会津北部土地改良会計理事三期（一期四年）

5 加納村土地改良会計理事一期三年

6 加納村文化財審議委員会副会長二十年

7 加納村郷土史研究会会長三年

8 小中学校 PTA会長

家庭では花のハウス園芸十三年、収益はまずまず。

学校同級生九人戦死、その内七人は特攻。

同級会長 満八十歳の同級会二十三人出席。

龍兵団

ビルマ戦線より還る

佐賀県 岸 川 力 蔵

私は大正十（一九二一）年十月に生まれ、昭和十六（一九四一）年徴集兵であります。現役入営ではなく、昭和十七年四月に応召され、久留米歩兵の第一四

八部隊に入隊しました。

翌昭和十八年九月、ビルマ派遣軍への第二回目の補充要員、二百人の中の一員として、雲南省でビルマ作戦中であつた第五十六師団、歩兵第一四八連隊（龍第六七三六部隊）に転属、第三機関銃中隊に配属されました。

雲南騰越の部隊が玉砕したため第二機関銃中隊に転属、その後、約二カ年間に、転進作戦・輸送作戦・怒江作戦・克作戦・断作戦と、九回にわたる作戦に参加、隊員二百人のうち、生き残りは三人という、熾烈な戦闘の連続でありました。

その後、ビルマ・ヘシャン州・インレー湖ナンビル川にて、昭和二十年八月終戦。以後、ビルマ、タイ国境サルイン河を渡河、バンコクにて英印軍に抑留、約六カ月。昭和二十一年五月バンコク港にて乗船、六月に神奈川県浦賀港に上陸、同日付をもって龍師団解散、後、故郷に復員したのであります。よくぞ生還し、現在があるとは、奇跡という他ありません。

戦後既に五十七年になりますけれども、私も大正十

年生まれで、ちょうど八〇歳を越すことになりました。体力も消耗しておりますが、頑張つて生き続けております。戦争の話をすると、昔は昔、今は今という人もおります。しかし私は一生忘れることはできません。

戦争というものは人間の殺し合いです。こんな悲惨なものはないと思います。殺すか、殺されるか、こんな切羽つまつた体験は、若い人には分からないでしょう。これから申し上げることは、そんな体験ですから、理解できるかどうか分かりませんが、私の記憶に基づいて、概略をお話します。

昭和十七年四月、歩兵第一四八部隊に入り、昭和十八年九月、ビルマ派遣軍の第二回補充兵として雲南龍歩兵第一四八連隊第三機関銃中隊に配属されました。ちょうど門司を出港してから四カ月掛つた訳です。

途中いろいろありました。私は独身でしたが、中には約半数は応召の妻子のある人たちもおり、さぞ辛かったことと思います。その方たちと一緒に、内訳は

久留米の二百人、第一四八連隊が二百人、福岡の第一六連隊が二百人、大村連隊が二百人など千二百人が第二回のビルマ要員として行った訳です。雲南省のマンダレーからラシオへ、ラシオからはトラックでしたが、ヒマラヤ山脈の近くの四〇〇〇メートルの黒龍山脈に第一四八連隊の本隊が交通壕を掘って重慶軍と対抗しておりました。そこまで私たちは高い山を登って追及して行きました。ところが既に重慶軍と戦闘中で、重慶軍は四連砲、機関砲、自動小銃など米軍装備の兵器を持ち我々の装備とは全然違う訳です。

ちょうど行ったところで、交通壕に入って中隊長に申告いたしました。ところが私たちが到着したその日に、重慶軍の戦闘機が飛んできて、交通壕を掃射する訳です。そして掃射したあげくに今度は爆撃機が飛んできて交通壕に爆弾を落とすという正攻法で、めちゃくちゃに攻撃してきますのでたまったものではありません。そして飛行機による攻撃が終わると、今度は山砲、迫撃砲が飛んできます。交通壕にいた兵隊はほとんど殺され、血の海です。

緊急命令で我々も配備に就くのですが、敵は第一線がやられれば第二線と正攻法で攻めてきます。このような戦争を約一週間やりまして、第一線は撃破しましたが第二線が上がってきた時、我々は弾がない、水はない、加えて戦死者が出る負傷者が出るので全く戦争ができません。

そのためラデンというところまで、師団命令で下山した訳です。ラデンに着きましたが、敵は怒濤のごとく下りてきます。そうしてトウエスの方へ行きまして、ここは雲南省でも大きな町で、この城壁の中に第一四八連隊は全部入っていました。

既にその時は一個大隊は菊部隊の応援に行っており、部隊は連隊本部と第一・第三大隊、それから山砲の一個大隊、野戦病院、憲兵分隊、野戦通信隊などでした。ところが敵はすぐ包囲してしまい、我々は袋の鼠でした。そういう中に敵はラモーにいた第一・三連隊の攻撃に向かいました。ところが後方にまだ友軍がおりますので、敵は後方を遮断した訳です。だから城

壁の中の1個大隊を転進させることになり、それには第三大隊が命令され、私も一緒に行ったために玉砕せずに命拾いしました。

第一一三連隊と第一四八連隊は合同で突撃ばかりでした。私は機関銃隊でした。機関銃隊は一個分隊十一人で、私はその時初年兵でしたので弾薬掛を半年ばかりしました。戦闘の間は小銃隊が最初に突撃します。そのあと機関銃隊が行きます。私は小銃隊だったら、もうこの世におりません。

戦闘はもう地獄です。今福岡におります私の中隊長が本を書きました。西日本新聞に連載しておりましたので電話を掛けたのですが、「もう生きておる者はおらん。私と貴方と東京の佐藤の三人しかいない」とのことでした。

約二カ月戦闘をして、占領したのですが、龍陵は取ったり取られたりでした。それで仙台の第二師団、朝鮮編成の狼師団と合同作戦で、一挙に龍陵攻撃をやった訳です。そこで一応は全部占拠しました。

ところがその日のうちに大村兵団がヘイカというところで玉砕に近い戦闘をしていましたので、第一四八連隊の第三大隊に命令がきまして大村兵団を助けに行った訳です。ヘイカまでは二日二晩かかって朝五時頃に着きましたら大村兵団は下の方におり、我々は攻撃に入り、その一角を取った訳です。そして私が間道の歩哨に立っておりますところへ下から大隊長が上がってきて、「歩哨、ご苦労」と言います。

そうこうする内に、また龍陵は敵にやられてしまいました。ところがトウリツに残っておりました我々の戦友たちは、後三日ばかりの玉砕寸前でした。そして我々もそこへ行くつもりでしたが、行けない訳です。大隊長は東側の稜線に全部一列縦隊に並ばせ、全員で黙禱しました。玉砕は昭和十九年九月十四日です。男の涙でしたが、助けに行けない訳でした。

そして龍陵を降りまして、敵はなお攻めてきます。重慶軍はビルマとの国境線まで追って来るのです。一応ビルマ国境線まできますと重慶軍の追撃は止まりま

したので我々は助かりましたが、今度は友軍がインパール作戦に敗れ、どんどん下がってきます。

ところがインド方面からコンソリデーテッドという六発の飛行機がグライダー二台をワイヤーで繋いで引っ張って来るのです。一台には二百人ばかり乗っており、二台目には弾薬、食糧などでしょう。これを草原に降ろす。これにより後方の退路を遮断する訳です。それでラシオまで転進して再び戦闘を開始したのです。また、その飛行機はドラム缶を積んできて、それを落とすので、このドラム缶を落とした途端に戦闘機がきて曳光弾で銃撃し爆破する訳です。それで我々はラシオを退避しました。

ラシオから一〇里ほど下がったところのシボンに野戦倉庫があり、貯蔵米約一万トンを燃やしサイゴンの方へ逃げました。もう逃げるはかりで前進ではありません。そしてサイゴンには避暑地があり、野戦病院があります。この野戦病院にいたところが、ここも爆撃でやられており、ビルマ本道を菊部隊などがラン

グーンの方へ下がって行きました。ところがメイクテラには敵の戦車が来ており、ちょうど菊兵团、狼兵团が通過する時で、相当ここで殺られました。そういう情報が入りましたので、我々第一四八連隊の第三大隊はメイクテラに向け山を降りて来たのですが、助けることができませんでした。

その時ちょうど私は大隊長の伝令をしておりましたので、先頭に立って眼鏡で見えておりましたら、M4戦車があがって来ました。十四台まで数えました。大隊長に報告して入り口の橋を爆破しますと戦車は止まり、戦車と戦車の間に入っている約三十人ぐらいの部隊目がけて、我々機関銃隊は連続装填で撃ちました。すると敵は煙幕を張り、戦車砲を撃ち込んできました。戦車砲では目も開けられず、夜まで持ちこたえたのですが、夜間に撤退しました。

戦車は橋が爆破してあるものですから通行できず、我々はインレーコまで来て、その洞窟に入り約二週間過ごしました。そしてさらに後方に下がりましたところ、八月十五日に終戦の知らせがありまして、ナン

ビル川で英印軍の将校が来て武装解除されました。

我々は銃の菊の紋章を消して、銃口は砂で磨いて提出しました。

終戦になりました、サルイン河を渡河する時はタイ国に入った訳ですが、その前にインパール作戦にかかわった将兵はほとんどタイのチェンマイ方向に撤退しました。食糧はなく餓死の状態でした。最近一カ月前、地元のお寺の住職がチェンマイの奥へ遺骨収集に行かれました。相当収集されました。

我々はサルイン河を渡河して、行軍でチェンマイからバンコックへ行きました。英印軍による抑留は半年、昭和二十一年五月、バンコックから還って来ました。

ビルマの山野には今なお戦友の遺骨が散らばっています。南海も慰霊・収集に入った人がおりますけれども、恐らく奥地までは行かれませぬので、奥地にはたくさん残っていると思います。私も還って来てから、戦友の面影が朝晩ちらちらします。

【解 説】

第五十六師団は龍六七〇三部隊で、第十八師団、菊兵団と同様に久留米編成の我が軍最強の師団と称せられ、ビルマ作戦での玉砕部隊である。

岸川力蔵氏は、まさにビルマ生き残りの戦士であり、所属は、歩兵第四百四十八連隊である。同連隊の「部隊略歴」は次の如くで、ミートキーナ、龍陵、平憂、騰越、断作戦、克作戦等と玉砕部隊である。

歩兵第四百四十八連隊 部隊略歴

昭和十六年十一月十五日、動員下令。

十二月二十二日、編成完結。

昭和十七年三月三日、西貢上陸。

三月八日、出発。

三月二十六日、緬甸、蘭貢上陸。

三月二十七日、四月十四日、「サルウィン」河谷に向かう進出作戦中「トングー」「ケマビュー」付近において、将校二人、下士官兵一五人戦死、負傷五四人。

四月十四日～四月十五日、「ケマビユー」「ラシオ」に向かう進撃作戦中「ザエット」「ロイコー」「ラシオ」付近において将校二人、下士官兵一人戦死、負傷三人。

四月三十日～五月十五日、「ラシオ」「ミートキーナ」に向かう追撃作戦中、将校一人、下士官兵三人、戦傷死、負傷一三人。

五月十六日～六月十日、怒江省岸地区反撃作戦中、将校、下士官兵一七人戦死、兵一人戦傷死、負傷八人。

六月十一日、橄欖及騰越南方地区の掃討作戦中「クンロン」付近で戦死兵一人、戦傷二人。

八月一日～八月三十一日、怒江右岸地区の掃蕩中兵二人戦傷、将校一名戦死、下士官兵二人戦傷死、負傷五人。

九月一日～十一月三十日、騰越「クンロク」及平憂地区の討伐（イ号討伐）将校二人、下士官兵四人戦死、兵一人戦傷死、負傷一九人。

十二月一日～昭和十八年一月三十一日、騰越付近

討伐中、兵一人戦死、負傷三人。

二月一日～三月三十一日、甲号肅清討伐中国東衛馬面関蛮允付近の戦闘において将校一人、下士官兵一人三人戦死、下士官一人戦傷死、負傷一人。

四月一日～九月三十日、緬甸防衛並びに次期作戦準備中騰越北方地区の掃蕩において馬面関付近において将校一人、兵六人戦死、兵一人戦傷死、負傷八人。

十月一日～十一月三十日、怒江作戦中空査河付近において下士官兵五人戦死、負傷八人。

十二月一日～昭和十九年四月二十八日、「ウ」号支作戦中、里仁村付近の討伐において将校一人、下士官兵八人戦死、兵二人戦傷死、負傷七人。

三月十一日、保山県大遊塞戦闘において兵一人行方不明なり、その後状況不明なり。

八号作戦参加のため第一大隊は千人で四月十日千崖出発「ミートキーナ」方面派遣す。

四月二十九日、七月五日、遠征軍反撃作戦中「ミートキーナ」付近において将校二人、下士官兵五十二人戦死、下士官兵四人戦傷死、負傷、将校二人、下士官兵七九四人、龍陵救援のため第三大隊を師団直轄として、六月二十六日出発派遣す。

七月六日、十月五日、断作戦第一期中主力は騰越にて第一大隊は「ミートキーナ」付近、第三大隊は龍陵、平憂付近において将校二人、下士官兵二十七人戦死、下士官兵二三人戦傷死、負傷五三七人。

この外（騰越における玉砕者、将校五二人、准士官・下士官三四五人、兵一、三七七人、計一、七七五人）。

八月十三日、連隊長 藏重大佐戦死、楠野大佐連隊長として赴任途中、九月八日芒市にて戦病死。

九月十四日、連隊主力（除第一、第三大隊主力）騰越において玉砕。

十一月二十三日 神保大佐連隊長として赴任芒市到着、当時、同地付近において戦闘中の第三大隊主力（約三〇人）連隊復帰。

十月六日、十二月二十二日、断作戦第二期中、龍陵芒市付近の戦闘において将校六人、下士官以下九人戦死、将校一人、下士官兵三五人戦傷死、将校二人、下士官兵一八九人負傷。

十二月二十二日、二月二十日、断作戦第三期中「ムセ」「モンユ」「イナイロン」「ラシオ」付近の戦闘において将校九人、下士官兵一二〇人戦死、六一三人戦傷死、負傷一四一人。

二月十五日、隊長「ナムパカ」付近転進中兵一人不明となり、その後状況不明。

昭和二十年二月二十一日、四月九日、連隊長更迭「ラシオ」「シポー」付近の戦闘において将校三人、下士官兵五五人戦死、下士官兵八人戦傷死、負傷六五人。

三月二十四日、連隊「ライカー」付近転進中将校一人、兵一人行方不明となりその後状況不明。

四月二十日～五月二十八日、克作戦第一期中「ラウサウク」「ワロー」付近戦闘において将校一人、下士官兵二人戦死、下士官兵一〇人戦傷死、負傷二六人。

五月二十九日～八月十四日、克作戦第二期中「カロー」「シキップ」「ピンラウン」「インデー」付近の戦闘において下士官兵、二四人戦死、下士官兵一四人戦傷死、負傷二一人。

まさに「ビルマは地獄」であった。

戦争末期のビルマ

長崎県 種村 数一

私の家は普通の農家で家庭は父・母・私と妹が三人の六人家族でした。私は次男ですが、私が入隊する昭和十八（一九四三）年の春に長男が病死しました。

昭和十八年二月に私は、いつかは兵隊に取られるに違いない。それなら少しでも早く軍隊に入った方が良

いと思って現役志願をしました。幸い兵隊検査も皆さんと一緒に受けられて甲種合格となりました。

父母も長男を亡くした上に私まで居なくなるのは非常に心配だっと思いますが、時局柄口に出せずにいたのだと思います。

昭和十八年十二月一日、現役兵として長崎県大村の西部第四十七部隊（歩兵第一四六連隊補充隊）の西田隊（歩兵砲中隊）に菊部隊（第十八師団）要員として入隊しました。

早速、一期検閲のための猛訓練が始まり行先は激戦が予想されるビルマ戦線ですから直ちに役に立てる兵隊にならねばと自ら奮い立てて猛訓練に堪えました。

菊部隊は現役兵中心の部隊であります。それに引き替え竜部隊は召集兵が主体の部隊でありました。

私が入隊した西部第四十七部隊は竜（第五十六師団）部隊でありました。竜師団は、その頃、中国雲南省南端の山岳地帯で米式装備の中国軍十六個師団七万人と対していました。一五対一の戦争といわれまし